

水との付き合ひの変遷

——多摩川を例として——

芝浦工業大学教授

東京大学名誉教授

高

橋

松

本日は第二回目の下水文化研究会で、冒頭にお話をさせていただけることを光栄に思っております。

皆様の発表の意図・考え方も従来の技術研究発表会を核として膨らんだものになっていることをプログラムからも感じております。この会が東京で行われるということもあり、我々に馴染みの深い多摩川を例にしながら、水との付き合い方がどのように変わってきたかをお話申しあげたいと思います。

只今、建設省の松井部長もその要点をお話されましたが、第二次大戦以後もう半世紀になります。こ

の半世紀だけに限りましても、多摩川は、下流部は神奈川県ですが、多摩川流域の人達あるいは東京都民にとっては墨田川とともに日本を代表する都市を流れている川というさらに大きな意味があると思います。と申しますのは、歴史を省みますと常に江戸、東京と運命共同体であった、別の見方をすれば、ついこの間まで多摩川は江戸と東京に奉仕し続けた川であるといえるからです。東京が日本の都市の象徴であり、代表であるとするならば、多摩川は日本と一心同体で運命を共にしてきたために、多摩川

が辿った道は日本の川が近世以降辿った道の代表例であると思います。したがって、多摩川を話すことは相当の部分で日本の川に共通するものであり、水と日本人との関わり合いを懐古する例であるともいえます。

多摩川につきましては今まで様々な研究や調査が報告されていますが、私は私なりの考えで多摩川と我々が辿ってきた道の要点をかいつまんで話したいと思います。

先程申しましたように、多摩川は江戸および東京が使えるだけ使ってきた川、つまり江戸時代から明治以降、日本の首都の運命に大変大きな恵みを与え続けてきた川です。特に、第二次大戦以後、一時は水質が悪化し、場所によっては見る影もなくなったことがありました。日本の発展の為にあるいは江戸・東京の人々の為に奉仕し続けた結果、ある時期には非常に疲れ果ててすっかりやせ衰えてしまったのだでしょう。我々が今後多摩川あるいは多摩川に代表される日本の川との付き合いにおいては、今まで大

変お世話になった川に対してどうしたらよいのかを考え、東京あるいは日本を支えてきたことに対して恩返しをするという視点がこれからの水および川との付き合いの基本であると思います。

歴史の区切りとして江戸時代から見ますと、まず何と言っても玉川上水です。江戸はある時期以降は人口が当時としては世界最大の都市になっておりましたが、大都市江戸を支えた基本的なインフラストラクチャーが玉川上水であったと思います。玉川上水があったればこそ、後に神田用水その他の用水が建設され、江戸の水を支えたのです。

何といっても、そこに住んでいる人々が使えるだけの水が無ければその都市は成り立ちません。今や水は空気のようになってしまったのですから、一旦給水制限などの事態になりませんとなかなか水の有り難みが判らなくなってしまいました。給水制限、節水が叫ばれる時だけではなく、我々の生活を支えている様々な社会資本、なにかずく水について再認識したいと思います。

私は玉川上水は江戸三百年を支えた最初の公共事業であつたと思います。勿論、近代的な上水道ではありませんから殺菌とか、ポンプアップするようなものではありませんでしたから、時々大木戸のあたりで魚がそのまま出てきたりしたことが川柳の中にあります。ある意味では大変風流でもありました。

考えてみますと、水道に魚が出てくるとはまさに自然との共存の一つの証かもしれません。逆に水はそれほど清らかであつた訳で、そういう面では良き時代でありました。ともあれ、玉川上水という大土木工事によって江戸の水は支えられ、その後さらにいくつかの上水が出来て、東京の水は安泰になったのです。

尤も、ある時期には水道はけしからんという学者の意見があつて、それを取りつづすという事件がありました。水道への批判の一つの原因は、その頃の学者の説によると次のようなことでした。すなわち、江戸時代は火事が多かったのですが、火事が頻発するのは水道が出来て大気の水を吸収してしま

うからだといふのでした。それが受入れられて、水道を一時埋めるといふ時期がありました。

その頃は日本は鎖国で、発展しつつあつた西ヨーロッパの科学技術を受け入れておりませんでしたので、いわゆる自然現象を近代科学の理論で判断するという素地がありませんでした。学者も漢学者とか儒学者が中心でして、それは日本の風俗、道徳を培つたでありましたが、科学という点では素人といふか自然科学的見解に乏しかつた訳です。学者は今でもそうですが、時々誤つたことを言いますので、政治や行政の方はその取扱いに注意を要するかもしれません。

江戸の火事と言えば、一六五七年が明暦の大火です。それ以後も度々大火がありました。大火の復興の時に多摩川流域、青梅周辺の材木が大変貢献しております。今日は多摩川を例にということですが、川といった場合に、水が流れている川筋だけではなく、流域全体を把握したいと思ひます。つまり、流域の土地の使い方あるいは流域に住んでいる人達が

どのような生活をするかが川には如実に現れるからです。

明暦の大火では十万人の死者を出し、江戸城も焼いてしまった大火事で、多摩川流域の木材だけでは足りなかったでしょう。あの火事が完全に鎮火しない内に、河村端軒は木曾福島に飛んで木曾の森林を買ひ占めてしまいました。それが、彼が巨万の富みを稼ぎ始める第一歩であったというのは有名な話です。

端軒は我々の先輩にあたる偉大な土木技術者ですが、単に舟運だけではなく淀川の今の安治川を開削したのは彼の設計ですし、水運、治水その他様々な仕事をした人であり、一六一七年に生まれ一六九九年八六才でこの世を去っております。ここで、河村端軒が出てくるのは、実は数日前に鎌倉の建長寺にあります彼のお墓参りをしてきたからです。お墓は大変荒廃しており、六年後に三百年祭があるので、それまでにこれを何とか復興しようという集いがあったのです。皆さんに河村端軒がいかに偉大であっ

たかを多くの方々に知っていただこうとして集まったのですから、この席をお借りして紹介させていただきます。

河村端軒も多摩川と無縁ではありません。彼は江戸に米を運ぶために東廻り西廻りの航路を日本で最初に開発した先駆者です。海の航路を開発して、船を下田とか三崎へと運航できるようにしたのです。海の中から航路といっても何も工事はないだろうと考えるのは素人で、港の整備や船の整備などいろいろあります。その後、日本海を通って酒田から下関経由で瀬戸内海を通り大坂へ行く西航路も開いております。

彼は木曾福島の森林買ひ占めが有名ですので、あこぎな商人と思われていますが、俗な言葉で言えば抜け目のない人、先見の明のある人でした。彼は航路を見る時に、日本の国土全体を考えていたのだと思うのです。それが西日本の山陰地方の港町周辺の開発に大きな契機となりました。

話とはびますが、明治になっても多摩川と東京と

は様々な関係がありますが、大きな事件は大正十二年の関東大震災でした。これは世界の災害史上でも稀なほど悲惨なものでしたが、あの時、大震災で焼け出された人々の相当部分が多摩川の流域に引っ越しておられます。そして、そのまま住みついた人々もいますし、特に中流域ですが一時的に居を構えた人々も多かったのです。また、大震災の復興のために、木材のみならず様々な資材が提供されています。余り知られておりませんが、この復興に多摩川流域の果たした役割は少なからぬものがあったと思います。

東京の人口が段々増えてきまして、将来の水をどうするかということで、昭和初期に今という東京都水道局が詳細な水源調査を行っております。その時点で、利根川上流の水をどうやって東京へもってこようとか、見沼田圃をどう使おうとか、関東地方全体、利根川流域全体について多くの調査を行っています。しかし、何と言っても一番身近なのは多摩川ですから、多摩川について突っ込んだ調査が行われ

、そこで浮かび上がってきたのが小河内ダムです。小河内ダムが出来上がったのは昭和三十二年ですが、その前年に佐久間ダムが完成しました。佐久間ダムが昭和三十一年に完成しました時に、これが日本で最初に百メートルを超えたダム、しかも一挙に五十メートルも超えてしまったのです。小河内ダムも一四九メートルですからほぼ同じ高さなのですが、完成が一年遅れたために、全国的あるいはダムの歴史から見ますと早いもの勝ちであることと、岩波映画の建設記録映画が世界中から賞をいただいたこともあって、PRが行き届き、その面でも小河内ダムは社会へのPRの点では損をしていると思います。

しかし、その計画は実に昭和一桁代に樹てられたものであり、その時点では大変雄渾な計画だったと思います。佐久間ダムの計画は戦後であり、電源開発促進法が制定されたのが昭和二十七年であり、しかもスピード工事で行われましたが、計画性という面では小河内ダムの方がはるかに先験的且つ雄渾な

ものです。あれだけのダム計画を、しかも百メートルを超すダムなんか無かった時代に作られたのは見事という他ありません。

残念ながら、戦争末期には資材、労力不足で一時中断されました。終戦直後の都議会においては、再開すべきか否か大變議論になっております。何しろ、終戦当時東京の人口は三百万人を割っておりまして、それから、ともかく戦災復興が最優先、それから食料難の時代でしたので、少なくともこの時代は水不足は無かったです。ですから、小河内ダムを再計画するにも相当の費用がかかるので、議員さんから反對されたのも当時の状況からは無理からぬものがあったかもしれません。しかし、水道関係者の方々の大變な努力によって工事を継続することになり昭和三二年にあのような大きなダムが建設されたのです。ここで、多摩川はまた東京に大きな貢獻をするようになります。

しかし、小河内ダムからの放流は、玉川上水で羽村から水を分水してしまうため、羽村の取水堰から

下流の多摩川の水はやせ細ってしまいました。小河内ダム、これは東京にとってかけがえのない水であります。当然下流の流れ方は以前と変わってしまったのは当然のことであります。一方、東京の人口はダムが出来た頃から急速に増えてきます。人口増加は水の使用量も増えるということで、昭和三十年代の人口増加あるいは水の使い方の上昇よりは以前に考えられていたよりもはるかに上回るものでした。

小河内ダムが出来ました翌年の昭和三年は狩野川台風が来ましてダムは満杯になりました。その翌年の三四年は伊勢湾台風がありました。ダムはまたまた満杯になりました、余水吐の水が滔々と流れたのですが、それ以来余水吐には全く流れなくなりました。

昭和三十年代後半になりますと、雨の降り方が減ってきました。おまけに台風も多摩川の上流域を通過しなくなりました。それに反して、東京の水の使い方は激しく増えていったのです。当然需要供給の

バランスが崩れて、東京は水不足に悩むようになります。昭和三六年頃から夏になると「水源地は異常渇水」というポスターが各所に貼られたことを記憶しています。それが、昭和三九年東京オリンピックの年に破局的段階に至り、小河内ダムの貯水量は確か三百万トンを超えていたと思います。満杯で一億八千万トンです。オリンピックを前にして、東京はホテル建設ラッシュであり、十月のオリンピックの時に海外からのお客さんに十分に水を提供できるだろうかと非常に心配をしました。ともかく、この水危機は象徴的な出来事であって、しかも東京なるが故に世界のニュースにもなったのです。

東京だけではなく、臨海工業地帯に工業立地をしようとする、やはりどう水を確保するかが非常に深刻な問題でした。その頃、現在の新日鉄が君津に工場建設を計画しました。ここは、大阪市位の水を使用するのですが、世界最大の製鉄所を造るのに水をどうするかで相談を受けたことを記憶しております。

とにかく、水不足の時代でした。当時は小河内ダムは評判が悪く、お気の毒な状況でした。こういう水不足に備えて造られたダムではないのかとか、一しようがないダム」と読めとか散々からかわれたりしました。これは小河内ダムには気の毒でして、あの激しい人口増までも考えた計画ではなかったし、つまり昭和三十七年に都の人口が一千万人を超えています。ですが、そこまでは考えていなかったのです。さらに、これはある程度計算しなければなりません、空梅雨とか台風も来なかったことも水不足を深刻にしました。人口が一千万人になった時点で利根川の水が都に入っていなければならなかったのです。それを、全て小河内ダムの責任にしてマスコミは都や水道局を非難し続けておりました。現象面だけを追って問題の奥を見ようとしないうちに非難を受けて、私は率直に言って小河内ダムが気の毒でした。リリース投手がいけないのに、延長戦を何十回と投げさせられたようなものです。まあ、幸いなことに、その年の八月二十日から雨が降りました。しかし、雨が降り

ますと一時的に解決するものですから、水開発への世論も盛り上がりがないのですね。水害もそうですが、その直後は皆さん認識があるのですが、「喉元過ぎれば暑さ忘れる」になってしまいます。その後

は、多摩川に雨が降ってくれまして、時々水不足はありますが、三十九年の時のような深刻な水不足が起きていないのは有りがたいことです。そして、今都民が飲んでいる水の七割位が利根川の水です。多摩川の水は比率としては大分下がっておりまして、何かまた小河内ダムの際が薄くなったように言う人がいて、これまた困ったものです。

都は利根川の水を取れるときは多摩川の水を貯めております。小河内ダムは言わば渇水対策ダムの役割を果たしている訳です。大都市の水源は一か所だけでなく、いくつかの川に水源を持っていることが強みです。相模川からも、勿論お金を払っていますが、頂いております。

雨というのは気まぐれですから降らない時もあるわけで、今は主として量的には利根川に依存してい

ますが、だからといって、小河内ダムあるいは多摩川の東京の水道への価値は決して減ったものではありません。これを保有しているということで、多摩川は依然として都民にその恩恵を与え続けているのです。

東京の人口が増えてまいりますと、人の住む場所がなければなりません。そこで、大きな役割を果たしたのが、多摩ニュータウンです。ここでも多摩川流域のお世話になっているのです。多摩ニュータウンという大きな町を造ってそこに人口を吸収するところが、余り人口の無かった所にニュータウンを造るわけですから、多摩川の支流である匂田川流域に開発の中心がありましたので、洪水の時にこの流量が増える訳です。そこで、匂田川の河幅を大きく広げて洪水流量増に対応できる大工事を行いました。

流域を開発すると一般に洪水流量は増加します。今までは浸み込んでいた水が一時に地表を走っていくので、下水道が整備されれば当然下水道へ水が殺

到して、処理場、川へと水が出ます。ですから、それを予測して、乞田川の大改修工事が行われたのです。多摩川は東京と運命共同体ということでもあり、言い換えれば、多摩川とその流域は日本の経済発展の急激な変化へのインフラ建設にいろいろなことをして呉れています。小河内ダムはもとより、多摩ニュータウンもそうです。

また、忘れてならないのは、終戦直後に多摩川は砂利の面で大変な貢献をしております。つまり、建設ラッシュの時に、骨材が必要です。これは運搬費が支配的ですから、どうしても需要地に近い所から取りたい訳です。先ず、多摩川とか相模川が砂利の主要な供給場所になりました。しかし、余りにも掘り過ぎたために、河底が下がり、橋脚が出てしまうということ、その後、両川とも採取規制が強く行われるようになりました。

しかし、規制以前は若干無秩序だった面はありますが、東京の建設に対して多摩川の砂利や砂は大きく貢献したことは間違いないと思います。多分、多摩川

にとっては迷惑な話だったのでしょう。これが川が荒れ果てる大きな原因になりました。

それから、多摩川の流域に人口が増えてきますと一般的に下水道や下水処理場がどうしても一歩遅れることもあり、その段階で、これは多摩川に限りませんが、水質が段々悪化してきました。これも多摩川が都市化の犠牲になった例と思います。

江戸も東京も自然の一部である多摩川の都合も特性も考えずに、一方的に多摩川を利用しつくしました。そして、多摩川はいろいろな資源を持っていますので、水資源に限らず砂利資源なども含めてそれに応えてくれました。したがって、江戸、東京が今日あるのは、そういう観点から見ますと、多摩川に負うところが非常に多かった。けれども、どうも多摩川自身の本来持っている生き方に対しては大変失礼なことをし続けたと思います。そして、高度成長期には水質は悪化し、景観は損なわれ、流量も痩せ細り、あるいは河川敷も荒らされました。

そこで、これではならじと行政も市民も高度成長

期の終わり頃から、つまり昭和四十年代にはいった頃から、ようやくこれを回復すべくいくらか多摩川自身の身になって、多摩川と付き合おうではないかという動きが出てまいりました。

その例は建設省が昭和四一年に多摩川の河川敷を開放したことです。河川敷の開放は今から見れば当然のことですが、一九六〇年代においては多摩川の例が全国で初めてでした。つまり、河川管理者は河川区域の管理に全責任を負わされていますから、管理者の立場からは余り河川管理に理解の無い人々に入って貰いたくないという姿勢があったのです。

しかし、東京の人口が非常に増え、特に東京は公園面積が少なかったものですから、河川敷が見直される時期になりました。建設省でも一九六六年（昭和四一年）から第一次の開放を行い、一九七四年（昭和四九年）にはさらに拾い範囲の第二次の開放に踏み切りました。

その頃、多摩川で狛江の堤防が決壊しました。昭和四九年九月一日のことです。狛江市で一九軒の家

が流出したのです。その前の年にNHKの加藤迪さんが多摩川を例にして「都市が滅ぼした川」という本を、同じ年に横山理子さんの編集で「多摩川の自然を守る」という本も出ております。それぞれ大きな影響を与えたと私は思っておりますが、加藤さんに言わせると、多摩川は東京が滅ぼしたということになります。これはタイトルであり、当然それではどうすべきかが問題になる訳です。そして、丁度その直後にたまたま堤防が切れたのです。この堤防決壊が水害訴訟になり、一審では原告が勝ち、二審では逆転し、最高裁に行って差し戻しとなりました。高裁でもう一度裁判を行い、先般最終的な判決が出ましたが、おおむね原告勝訴となりました。これはやはり、多摩川の歴史というか、水害と訴訟あるいは行政に対して非常に重要な事件で、時間も長くかかりましたが、昭和四九年から今日に至るまでの河川行政の変遷、水害に対するものの見方に大きな影響を与えました。

この訴訟は、日本全体の水害訴訟においても極めて

て重要な位置づけになるということを本日申し上げておきたいと思います。これも多摩川なればこそでして、他の川でしたらこれほど大きな社会的問題になつたかどうか疑問に思います。マスコミの取り上げ方も多摩川は東京の川だからこそ大きく扱うのです。

多摩川の堤防が切れた昭和四九年は大分県でも大きな被害があり、多くの死者も出たのですが、少なくとも全国紙に関する限り地方で起きた水害はたとえ死者が出たとしても記事は一、二回程度です。ところが、多摩川の場合は一週間にわたり全国紙を賑わせたのです。あの水害は極めてテレビ向けの災害でして、三日間にわたって、家が一軒一軒流出するというニュース性があつたのです。堤防が切れたら、家が流れるところを撮影するのは、普通でしたら山の中などが多いですから大変です。ところが、多摩川の場合は都内ですし、しかも九月一日から三日の昼まで家が流れ続けたのですから、カメラを構えていれば撮れたのです。流された被災者の方には

大変申し訳ありませんが、テレビにとっては好都合な水害だったようです。

場所が東京ですと政治家もいれば役人や評論家もいますので、その談話も非常に丁寧に報道されました。さらにその後訴訟が起きまして、しかも長い道のりでしたので話題になり続けたのです。言い換えますと、それは、多摩川の重要性を物語っているのであり、多摩川と東京がセットで考えられるからです。つまり、新聞の見出しも「首都の川でー」という表現が多かったのです。

話とはびますが、一九八一年になりました多摩川の支流の野川で建設省が礫間浄化を始しました。この実験は各地で行われていましたが、実際の河川で具体的に実行したのはこれが日本で最初でした。野川の水が大分汚れてきましたので、これを河川敷に引き入れて礫の間を通して浄化したのです。これに限らず、全国の川の歴史を見ますと多摩川が一番最初という例が非常に多いのです。

一九八三年に建設省の京浜工事事務所は多摩川八

景を選んで発表しております。いまから十年前ですが、考えてみますと最近の十年で河川行政を始め水道、下水道や一般の流域の人々の川や水に対する考えなどが大きく変化しました。

景観の良いところを新聞社などが選ぶことはありますが、住民の方々に親しんでもらおうとして河川行政で行ったのは多摩川八景が初めてです。昔ですと、国が行いますと大臣管轄区間の中から選ぶということになるのですが、この多摩川八景は上流から下流までバランスを考えて、峡谷ばかりにならないよう河口まで入れてあります。景観を河川行政で大切にしなければならぬと考えた姿勢を高く評価したいと思います。それ以降、いわゆる水辺空間とか、最近では多自然型河川工法とか行政も河川に対する姿勢を変えつつありますが、多摩川八景がその先駆をなしたものであります。

私もこの選定委員でしたが、一人の委員が「あの建設省がこういうことをするのは画期的だ」と言っておりましてが、「あの」というのが行政の方に

は余り嬉しくなかったようです。しかし、それは一般の人々の考えをかなり代表していると私は理解しました。要するに褒め言葉なんです。今なら「この建設省がー」と言ってくださるでしょう。それもこの十年間の大きな変化でありましょう。

一九八六年、自分に関係することで恐縮ですが、やはり建設省京浜工事事務所が首頭をとり「多摩川誌」を編集いたしました。自分が編集長でしたので、面はゆいのですが、これは従来の建設省では作らなかったような本なのです。つまり、行政側が作るとそれは改修工事史になってしまうのです。大体、内務省以来の成果を書くのですが、多摩川誌は工事や治水に関しては二割もありません。

そもそもどうして多摩川という名になったのか、万葉時代から多摩を歌った歌だとか、つまり、文化、経済、民俗などを網羅したのです。編集に七年をかけ、一九八六年に出来上がりました。これは先般河川局長を退官された岩井さんが京浜工事事務所長のときのアイデア、およびその後を継いだ近藤さん

などの意図が強いと思いますが、残念ながら、その後はこれに似たようなものは出ていません。

河川行政に携さわる方々は、従来はどうしても河川区域のハードなものを専ら念頭に置いていたと思いますが私はその川の流域全体を視野にいれるべきと考えていました。地理、歴史、文化等、さらに歴史を遡って管理に責任を持っている河川がどう言う成り立ちを辿ってきたか、行政はそれにどう対応してきたか、民衆の歴史がその流域でどう育まれてきたかを知らずして河川管理はできないのだという観点でならば、編集を引き受けますと岩井さんと話したことを覚えております。私は河川工事史にはいろいろ批判意見を持っていたので、工事の記録だけでは自己満足でしかない。やはり流域全体を見つめる視点が欲しいと申し上げました。それが受け入れられて、ああいうものが出来上がったのです。

ただ、出来てしまうとどうもそれで終わりということになり易い。河川工事後は維持管理が非常に大切ですが、出版物も編集したらそれで終わりではな

く、それを作った主旨あるいはそこに盛られている情報などを読んで貰いたい、使って貰いたくて本はある訳です。多摩川流域を廻りますと、市町村長さんの部屋には多摩川誌があります。「お読みになりますか」と聞くと「いかにも重くて」とか言い訳にならないと思うのですが、果して多摩川誌編集の精神が十分に活かされているか、折角の情報が本箱の中に閉じ込められているのではないかと若干危惧しております。

多摩川八景とか多摩川誌とかこういうものを行政が出す姿勢は評価されるべきであり、行政側として多摩川に対する愛情があり、また多くの人にその川を空間的にも時間的にも理解していただくようにつとめ、一方、住民側から考えれば川に愛情を注ぎ理解することに努めることが川およびその川を流れている水との付き合いの基本であると思います。

今日いただきました題は「水との付き合いの変遷」ということです。多摩川を例に江戸時代以来の変遷を眺めてまいりましたが、これは決して多摩川に

限ったことではありませんが、我々と川との何千年の付き合いのほんの一部である戦後の半世紀だけでも我々と川との付き合いは目まぐるしく変遷してまいりました。

終戦直後の一九四五年から五九年の伊勢湾台風の時までを私は水害の頻発期と名付けておりますが、疲弊した敗戦で荒廃した国土に天も味方しませんでした。その間は大型雨台風とか梅雨前線がとりわけ暴れた時期で、川との付き合いは大変荒々しいものでした。その後、日本の経済も落ちついてきて、どうやら復興も目処がついた頃、今度は都市化が激しくなってきた、水の需要が上水道も工業用水も猛烈な勢いで増えました。つまり、高度成長期は水不足の時代、そこでは川と言えば水を取ってくる対象となり、そうしないと水が確保できないという状況でした。

それ以前は水害対策が川との付き合いの基本でした。一九六〇年代からオイルショックの一九七三年頃のいわゆる高度成長期は水不足の時代です。川と

言えば水資源開発の場としての意識が強かった時代です。オイルショックは日本の経済に大きな打撃を与えましたが、一方では日本人に生活をじっくり見つめる機会をあたえました。それ以前は大量生産大量消費といったアメリカ経済を見本としていましたが、オイルショックは資源を大切に扱わなければならないことを我々に教えたのだと思います。

オイルショックの年の一月に、東京都水道局は水需要抑制の提言をしております。その頃から、節水型社会とか「水は貴重な資源」と言われるようになりました。水道局の提言はオイルショックの半年前ですから、水資源開発のダムが出来難くなったことに端を発しています。いづれにせよ、水は貴重な資源だとの観念が一九七〇年代後半から我々の間に浸透し始めました。

同時に、「衣食足って礼節を知る」というか、我々も戦後の水害に悩まされ、物資不足に泣いた時代からともかく生活水準も上がって生活も豊かになってきました。そして、気を取り戻して周辺の川や湖

や沼を見ると、高度成長に使われて瘦せ衰え、汚くなった哀れな川が横たわっていたのです。そこで、環境という観点から川を見直そう、川に恩返しをしなければならぬというムードが出てきたのです。それが多摩川八景や多摩川誌であり、その後全国的に流行しております多自然型河川工法などです。また、全国至る所で川の生態系を守ろう、景観を重視した河川工法を考えよう、川辺に皆が戻ってくるアイデアを発展させようなどの機運が高まってきました。

丁度、そのような時期に、昨年から下水文化研究会が設立されたことはそういうムードをさらに具体的に発展させる大変意義あるものだと思います。

水は単に治水工事とか水資源開発とかあるいは最近の環境護岸だとかそういうスポットのものではなくて、その全体の後ろに文化があるという観点に立ってこそ初めて、我々の川や水との付き合いがより深まるものだと思います。私はかつて「堤防は文化である」ということを申し上げまして、蕪村の「春

風や堤長うして家遠し」という句を引用しました。つまり、蕪村は少年時代に淀川の堤防で遊んで、その追憶が一生彼の頭にあったようです。つまり、堤防に親しむ郷愁が彼の俳句の精神にあった、それは一例ですが、堤防は単に洪水を守るためだけにあるのではないということを意味しており、堤防は文化であると申し上げたのです。それを言った当初は余り理解して貰えませんでした。が、堤防も河川も今皆さんがここで研究されている下水というものも文化という観点に立ってこそ下水道の背景が掴めるのだと思います。

我々は二千年の歴史を通して大変見事な技術と芸術を磨いてまいりました。それは文化だからです。下水文化研究会もそういう観点で誠に高邁な理想と時宜を得たアイデアで発足したものだと思います。これが発展することは日本の水文化をさらに発展させる機縁となりますことを期待して止みません。

